様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：２１２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｋ０４０７７

研究課題名（和文）地域コホート法による「人間発達と社会変動」の検討：昭和ひと桁世代を対象として

研究課題名（英文）A Cohort Study of Human Development and Social Changes

研究代表者
福島　朋子（Fukushima, Tomoko）

岩手県立大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：１０２８５６８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、高・高年齢のハンセン病回復者及び台湾の日本語世代に対する聞き取り調査を実施し、人間の生涯発達と社会変動との関連を考察することを目的としたものである。考察の枠組みにはBaltesの理論が用いられたが、本研究は生まれた時期だけではなく、対象が所属する社会集団を限定することでBaltesの理論のより一層の精緻化を図ろうとするもので、この方法を地域コホート法と呼ぶ。調査の結果、上記２つの対象についても、Baltesのいう標準年齢的経験・標準歴史的経験・非標準的経験という３つの影響因で分析可能であること、またこの方法によりそれらの間の相互関係をより一層明確にできることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
社会的意義としては、本研究が対象としている昭和一桁世代は、昭和から平成・令和にかけての激動の時代を共通に生き抜いた人々である。長寿化もあって、これだけの変動を生涯で送った世代はわが国の歴史では稀である。彼らの体験や証言を研究対象とした点があげられる。
学術的意義としては、生涯発達心理学においては文脈主義が理論的な柱の１つとなっているが、研究レベルでは各発達段階での実証に留まっているものが少なく、本研究はその嚆矢である点があげられる。また、人間発達と社会変動との関連を、Baltesなどの理論を踏まえながら、よりダイナミックに捉えようとしている点があげられる。

研究成果の概要（英文）：This study intended to investigate the relationships between human psychological development and social change through retrospective interviews with Hansen's Disease sufferers and Taiwanese Generation with Japanese-style education in old-old aged. Although Baltes' theory of contextual influences on human development was adopted as a framework of reference, this study aimed to make his model further refined using what we called "area cohort method" targeted at a group of people who are born at roughly the same time period in particular social groups. Results suggested that the life stories of above two social groups could be analized by Baltes' three systems of influence such as normative age-graded influences, normative history-graded influences and non-normative influences, and that mutual relationship among them could be described more clearly by using this method.

研究分野：生涯発達心理学

キーワード：発達の文脈主義　ハンセン病回復者　台湾日本語世代　聞き取り調査　社会変動　バルテス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

これまで私たちは「人間発達と社会変動」というテーマで研究を進めてきた。このテーマについては，「大恐慌の子どもたち」の G.H.Elder が先鞭をつけ，その後，P.B.Baltes が生涯発達の基本的決定因とそれらの相互作用に関して，U.Bronfenbrenner が生涯発達に関わる人間－環境の関係性について生態学的な視点から，それぞれ概念化を行った。最近では R.M.Lerner が，発達における文脈主義を提唱している。Elder から既に 30 年以上経過しているが，「生涯」を見通した実証的な研究の積み重ねという点では，対象の時間的広範さや研究方法上の困難さもあいまって，特にわが国においてはそれほど行われているとはいえないのが実状である。

私たちは，このテーマの解明へ向け，これまで 75 歳以上の高・高齢期(Old Old)にある人々の生涯を聞き取り調査し，彼らのライフヒストリーを作成するという手法を用いて，研究を進めてきた。現在までに調査してきたのは，高齢過疎村落（離島）に在住する高・高齢者，現在高・高齢期を迎えているハンセン病回復者の２つである。Baltes は生涯発達の決定因として標準年齢的要因，標準歴史的要因，非標準的要因という３つをあげており，そのうち標準歴史的影響は「歴史的時間，世代が関連した歴史的文脈に結びついている生物学的，および環境的な影響」と定義されている。私たちが，上の２つに研究対象を絞り込んだのは，標準歴史的影響を記述しようとすると，生まれた時期（時間的なコホート）のみならず，対象が所属する地域や社会集団をさらに限定して，それらの間の違いを調べることで，Baltes の理論をさらに精緻化することが可能となると考えたからである。

これら２つの研究は，いずれも，昭和ひと桁台に出生した，現在高・高齢期に達している人間を対象としているが，彼らは昭和初期の好景気，それに続く大恐慌，太平洋戦争，終戦，戦後復興，高度経済成長と石油ショック，バブルと崩壊，長期デフレ，という昭和から平成にかけての激動の時代を共通に生き抜いた人々である。その一方で，彼らが所属する地域や社会集団に特有の社会的状況もなかったわけではない。私たちが調査した高齢過疎村落（離島）は，上の時代的な動きに連動するような形で，貧しい漁村の時期，捕鯨で栄えた時期，捕鯨中止後の模索の時期，過疎と村おこしの時期というように，その地域特有の社会変動があったところである。

また，ハンセン病回復者の場合も，昭和 30 年代までの療養所での隔離が厳しかった時期，昭和 40 年代以降における隔離が緩くなり外部社会とのかかわりが持てるようになった時期，そして平成に入ってからの隔離が廃止され外部社会に開かれるようになった時期，というように，ハンセン病や回復者をめぐる社会的な位置づけや扱いが大きく変化している。このように，私たちは国全体のレベルから，所属する地域や社会集団のレベルまでの社会変動のなかで，対象者がどんな生活をし，どのように社会認識や自己認識，時間的展望，人間関係などを発達させてきたのかを記述し，分析しようとしてきたのである。

これらに加えて，新たに台湾・日本語世代の人々に聞き取り調査を行い，彼らのライフヒストリー作成も試行的に実施している。台湾は戦前日本統治下にあり，現地台湾人に対しても日本式教育が行われていたこともあって，台湾で生まれた，現在 85 歳以上の高齢者はおおむね日本語を理解し，話ができる。日本語世代といわれるゆえんであるが，彼らは，これまで私たちが調査を行ってきた人々と同じ昭和ひと桁台の生まれであり，日本統治下における好景気，世界恐慌，太平洋戦争，終戦を経て，戦後は中国国民党による統治，戒厳令，経済成長，そして戒厳令解除と民主化といった社会変動を経験している。

以上を踏まえ，本研究は，これまで行ってきたハンセン病回復者に加え，台湾における日本語世代を対象とした調査を本格的に実施し，これらを総合することで，「地域コホート法」の観点から，この世代における「人間発達と社会変動」の関係性を検討することを目的とした。

２．研究の目的

１）これまで進めてきた，高・高齢者の調査のうち，ハンセン病回復者を対象とした聞き取り調査を継続し，対象者のライフヒストリーをより精緻なものとする。その上で，昭和ひと桁台に出生した人々における，標準年齢的要因，標準歴史的要因となりうる社会的事象・状況との対応関係を把捉する。

２）現在高・高齢期を迎えている台湾・日本語世代を対象に，子ども時代から現在に至るまでの，彼らのライフヒストリーについて，特に生活内容や体験内容，自己認識，社会認識，時間的展望などについて聞き取り調査を行う。

３）台湾の戦前から戦後，そして現在に至る歴史や社会・文化的状況とその変化について，文献調査や有識者からのヒアリング等を行い，日本語世代の標準年齢的要因，標準歴史的要因となりうる社会的事象・状況を特定し，２）との関連を把握する。

４）１），３）の結果を重ね合わせ，昭和ひと桁世代の既存の研究も含めて総合することで，この世代の「人間発達と社会変動」の関係を検討する（これを地域コホート法と呼ぶ)。さらに対象者特有の非標準的要因にも着目しながら，Baltes のいう生涯発達にかかわる３つの基本的決定因の相互作用について考察する。

３．研究の方法

１）高・高齢のハンセン病回復者を対象とした聞き取り調査とライフヒストリーの精緻化：これまで私たちは，高・高齢のハンセン病回復者 11 名に対して，現在に至るまでの人生に関す

る聞き取り調査を行い，対象者それぞれのライフヒストリーを作成してきた。今回は，まずこのライフヒストリーを基盤にしながら，存命している５名を対象に確認的な聞き取り調査を行い，精緻化を図る。
２）台湾・日本語世代を対象とした聞き取り調査とライフヒストリーの作成：台湾・日本語世代 14 名を対象に，現在に至るまでの人生に関する聞き取り調査を行い，対象者それぞれのライフヒストリーを作成する。同時に日本統治時代から戦後，現在に至る台湾の歴史や社会的状況等の変化について，文献や有識者からのヒアリングを通して把握する。
３）①，②で得られたライフヒストリーと社会変動との関係性の検討：①，②で得られた対象者のライフヒストリーと，昭和初期から戦後，現在に至る我が国や台湾の歴史や社会的状況等の変化とを照らし合わせ，人間発達と社会変動の関係性についての考察を行う（これを地域コホート法と呼ぶ)。

４．研究成果
１）高・高齢のハンセン病回復者について
①ハンセン病をめぐる歴史や現在高・高齢のハンセン病回復者が過ごしてきた状況
　ハンセン病はらい菌（Mycobacterium leprae）に感染し発症することで生じる病で，1873 年に Hansen によって同定されたものである。この菌の病原性は低く，たとえ感染しても免疫がない，栄養状態が悪いなどの悪条件が重ならない限りは発症しにくい。現在では医学的な治療法が確立している。
　20 世紀初め，まだ医学的に未解明の頃は，世界的に患者の隔離が有効だと考えられており，そのためわが国でも 1907 年の癩予防ニ関スル件，1931 年の癩予防法により，隔離政策が採られた。その後，1943 年に Faget が有効性を確認した薬剤プロミンによって治療への道筋ができ，また医学的解明も進んで，1952 年に世界保健機関（ＷＨＯ）で患者の隔離は必要ないことが確認されるなど，1950 年代後半には隔離政策からの転換が世界的な潮流となった。しかし，わが国においてこれらは反映されず，隔離政策は維持し続けられた。らい予防法（以下予防法と略）が廃止されたのは 1996 年のことである。
　このため，特に現在高・高齢になっているハンセン病回復者は，長期間にわたって職業選択や移動，居住の自由等を著しく制約された生活を余儀なくされた。2001 年には隔離政策に対する国家賠償訴訟熊本地裁判決（以下，国賠訴訟）を受けて，隔離政策の継続に対する賠償が認められたものの，回復者の大半が高齢であったこともあって，社会復帰した者はごく少数にとどまっている。
　2019 年 5 月現在，国立ハンセン病療養所 13 施設などに 1,211 人が入所しており，入所者の平均年齢は 85.9 歳 82.6 歳となっている。
②現在高・高齢のハンセン病回復者の概況
　現在現在高・高齢のハンセン病回復者は，大半が戦前・戦中を含む，1950 年以前に入所した人々である。入所時の年齢はおおむね 10 代である。入所までの経緯については，物理的な強制を経験した人もいるが，治療を入所の理由にあげる人も少なくない。しかし，「家族に迷惑をかけ，家には居づらかったので，療養所に来てほっとした」と述べた人がいるように，社会的・心理的な強制があった点に注意が必要である。また，療養所への移動中，特に列車乗車時における差別体験は回復者の多くが語るところである。
　この世代は，入所直後，プロミン治療開始にはまだ数年ある時期であり，また，終戦時の食糧難などもあって，病は不治で，そう長くは生きられないと思っていた人が多い。実際にこの当時死亡者も多く（ハンセン病そのもので亡くなった人は少ない)，末期の看取りが入所者の関心事となっており，それが結婚の理由の１つになっていたという。また，当時の療養所では患者作業があり，要介護者の付き添いがというのが当時の入所者共通の義務であり，さらに施設から任命された係にまつわる業務が義務的に行われた。
　1948 年に始まったプロミン治療は，翌年には入所者の大半にいきわたる規模の予算措置を受けた。この治療により，入所者の症状は劇的に改善され，長期的な人生展望も持てるようになった。それは喜びであると同時に，これからの人生をどのように生きていくのかという課題を背負うことでもあり，後遺障害や再発の恐怖との闘いでもあった。
　というのも，初期のプロミン治療では必ずしも処方が確立されていたわけではなく，そのために薬の副作用による後遺症が生じたからである。また，怪我や火傷による傷の化膿が原因となって，後遺障害を負った場合もある。特に症状が進んで手や足，目の感覚が麻痺した患者は，怪我や火傷をしても直後には気づかず，そのためそれらの治療が遅れたのである。同時に，この世代では，ハンセン病の症状が進んでからプロミン治療が行われており，また患者作業に従事する人が多かったことも相まって，強い後遺障害を負った人々が多い。
　さらに，初期のプロミン治療は再発率も高かったことも重なり，入所者は，長く生きられる見通しは持てるようになったものの，再発の恐怖も抱えての生活を余儀なくされた。社会復帰を目指した人でも，途中で断念し，療養所への定着を決断せざるを得なかったのは，こういった事情によると考えられる。
　在郷家族との関係は，実家には帰れないのが一般的であった。手紙や電話での連絡が中心であったが，それも親の死去やきょうだいの婚姻をきっかけに断絶状態となったケースが多い。
　この世代に対する教育的処遇については，義務教育（国民学校）修了者については，入所後

の教育的措置はほとんど行われていない。国民学校中途者については，療養所内の学園（国民学校の分教室としての位置づけを得たところもある）で教育が受けることもできたが，基本的に本人の希望によるものであったようである。また，子どものなかには成人用の宿舎に入れられ，成人とほぼ同様に扱われた場合もあったという。先にあげた患者作業を踏まえると，この世代は，教育の対象というよりは施設内の労働力としての位置づけがなされていたといえる。

高度経済成長期の 1960 年代に入ると，患者運動がさらに活発に行われるようになり，患者作業の職員作業への転換や住居等の施設・整備の充実などが入所者の定着に対応する施策が実施されるようになった。そして，この世代が 50 歳代を迎えた 1970～80 年代に，当時高まりを見せた福祉運動や市民運動とかかわりを持ったり，詩や俳句等の出版など公表したりする人々が出てきた。こうして外部の人々との交流を持った人々が 1990 年代の予防法廃止運動や国賠訴訟において中核的な役割を果たした。また，1998 年の国賠訴訟以降，ハンセン病に対する国民の関心が高まったことも相まって，語り部や講演活動を行う回復者も出てきた。

2000 年の国賠訴訟熊本地裁判決による勝訴･和解により，回復者の法的な名誉回復が行われ，在郷家族との交流再開が期待された。実際に交流再開した回復者もいるが，既に在郷家族は代替わりしていることもあり，本格化に至った人は少数だと思われる。在郷家族に受け入れられた人は自分の存在が認められたという感覚が強いようであるが，そこまでいかないうちに要介護状態となり，生涯を終えた回復者が少なくない。故郷や在郷家族への想いについて語る回復者は多いが，名誉回復後 20 年経てもなお，彼らの期待に応えられる状況にはなっていないと言わざるを得ない。

なお，本研究に協力してくださった回復者の大半は，療養所の外部の人々とも一定の関係を築いている方（もしくはその関係者）であり，その背後に外部の人の動向に関心を持ちながらも，つながることに躊躇している，多くの回復者が存在していることを付記しておく。

２）台湾・日本語世代について

①日本統治時代から戦後，現在に至る台湾の歴史や社会的状況

現在台湾に在住している，おおむね 85 歳以上の高齢者で台湾生まれ・台湾育ちの人々は，終戦まで日本の教育を受けていたこともあって，日本語が堪能な人が多く，日本語世代と呼ばれている。台湾は，終戦まで日本統治下に，戦後は大陸から移動してきた中国国民党の統治下におかれた。1947 年に戒厳令が布告され，これが解除されたのは 1987 年のことである。社会経済的には，1960 年代後半からの高度経済成長，そして 1990 年代の民主化を経て，現在に至っている。

このように日本語世代は人生において，３度にわたる統治体制の変更を経験しており，その点で大きな社会変動のなかで生涯を送った人々であるといえる。以下では，全体の概況について３点報告する。

②マルチリンガルな日本語世代

日本語世代の特徴として，第一にあげられるのはマルチリンガルであるということである。彼らが日常生活で共通に用いることができるのは，彼らの日常語である台湾語（ホーロー語），学校教育等で習得した日本語，そして戦後強制させられた北京語である。これに，台湾は多民族国家であることから，客家語や，その他先住民族の言語が，また仕事等で獲得した英語が加わる場合がある。

同じ日本語世代でも，日本語の運用能力には個人差があり，戦前「国語家庭」（日本語家庭）と認定された家庭の出身者は概して運用能力が高い傾向がある。これらの人々では会話だけではなく読み書き能力も高く，和歌や俳句，随筆などの文芸活動を行っている人もいる。他方，「国語家庭」以外の出身者や日本統治時代が幼少で終わった人ではそれほど運用能力は高くなく，そのため日本語世代同士であっても，日本語と台湾語の「ちゃんぽん」で日常会話が行われている。

③日本語世代のキャリア

戦後台湾を統治した中国国民党は，台湾人を政府関連の職員としてほとんど登用しなかったため，日本語世代の男性の多くは起業した。戒厳令下，彼らは経済活動に専念し，政治にはかかわらないようにした。70～80 年代における台湾の高度成長を支えた企業の多くは，彼らが設立したものである。この時期台湾と日本の間では企業提携や貿易が進められ，ここに日本語世代の活躍の場が生じた。また，高学歴者では戦後医療関係や工学関係の技術者や教員としてのキャリアを歩んだ人も多い。戦後台湾では日本語の使用が禁止されていたが，技術水準を維持するために，日本語の使用が黙認されていた。女性については，大半が最終学校卒業後に就職し，その後結婚して，家庭に入っている。少数ではあるが，学校の教員になり，定年まで働き続けた人もいる。

④日本語世代の中・高齢期

87 年に戒厳令が解除され，集会が自由になると，当時中年期後期を迎えた日本語世代は，同じ世代同士で集まる機会を持つようになった。日本統治時代の学校単位で，日本から恩師を呼んだり，日本に恩師を訪ねたりして同窓会を開催した。また，短歌や俳句などの文芸活動も 90

年代に正式に行われるようになった。女性はこれらの会の裏方として大きな役割を果たしている。90 年代になって日本語世代は高齢期に入り，男性は，会社経営者以外，退職期を迎えた。当時台湾では，公務員や教員，軍人は年金が優遇されており，再雇用されなくても豊かな生活が保障されたため，日本語世代でも教員経験者は退職後余暇生活に入った。他方，企業労働者には，退職後も再就職や起業など，さらなるキャリアを積む人も少なくなかった。2000 年代に入ると，大半がリタイアし，余暇生活を送るようになる。上であげた日本語世代の集まりは，その後も継続し，これらの人々の活動の場となっている。

３）地域コホート法による考察

Baltes らのコホート研究では，同じ地域であるが出生時期に違いのある集団が対象とされている。これに対して，本研究の対象である，ハンセン病回復者，台湾・日本語世代は，昭和一桁台に出生している点で共通しているものの，その後の生活場所や社会状況に大きな違いがある集団であり，Baltes らのコホート研究が時間コホートであるのに対して，地域コホートと呼べるものである。

Baltes らは人間発達の経験要因を，年齢標準的経験，歴史標準的経験，非標準的経験に分けている。本研究が対象とした２つの集団には，それぞれの集団に所属する人々が特有に経験した社会的状況があり，さらにそれらを包摂するよりマクロな歴史的・社会的状況があることが示唆される。その点で，Baltes らの歴史標準的経験は，所属集団ごとの，よりミクロなレベルから，世界的な規模に至るよりマクロなレベルまで階層があり，この部分の整理が進めば，非標準的経験は，所属集団でも稀な出来事や個人の偶発的な出来事に限られるようになるものと思われる。

また，Baltes らは人間発達には獲得と喪失があると述べており，年齢標準的経験では一般に老年期は喪失のほうが多いと考えられているが，今回の２つの集団をみると，確かに身体的・健康的側面では喪失が多いものの，人間関係や世代性という点では老年期になってから獲得されているものが少なくない。これは，ハンセン病回復者で言えば，予防法廃止や国賠訴訟の運動に一般市民が関わったためであり，台湾・日本語世代であれば，1990 年以降の民主化の進展と日台の交流拡大によるものである。ここに年齢標準的経験と歴史標準的経験の相互関係をみることができる。

本研究を通して，Baltes らの言う，年齢標準的経験，歴史標準的経験，非標準的経験が生涯発達の分析に有効であること，そしてこれに地域コホート法を加えることにより，それらの相互の関連性がより精緻化できることが示唆された。

４）本研究のインパクト

①生涯発達心理学においては文脈主義が理論的な柱の１つとなっているが，研究レベルでは各発達段階での実証に留まっているものが少なくない。本研究は，幼少期から高齢期までの生涯を射程に入れており，人間発達と社会変動との関連を，Baltes などの理論を踏まえながら，よりダイナミックに捉えようとしたものである。

②本研究が対象としている昭和一桁世代は，昭和初期の好景気に生まれ，それに続く大恐慌・太平洋戦争・終戦・戦後復興のなか成長期を送り，成人期に高度経済成長と石油ショック，バブルと崩壊，老年期に入ってから長期デフレ，災害の多発という昭和から平成・令和にかけての激動の時代を共通に生き抜いた人々である。長寿化もあって，これだけの変動を生涯で送った世代はわが国の歴史では稀である。彼らの体験や証言を研究対象とした点にも本研究の独自性がある。

③本研究は台湾・日本語世代を対象としているが，わが国の心理学界において日本語世代を対象とした研究はほとんどない。また，ハンセン病回復者の生涯を取り扱った研究もそれほどはない。本研究が採った，時間的，地域的に対象を絞って記述していく手法は①の文脈主義に立つものであり，そうした研究の嚆矢でもある。

【謝辞】

本研究に長期間にわたって調査協力していただいた，ハンセン病回復者の皆さま，そして台湾の日本語世代の皆さま，そして調査が円滑に進むよう仲介をしてくださいました関連機関の皆さまに深甚の感謝を申し上げます。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Hiroshi Numayama, Tomoko Fukushima, Takekatsu Kikuchi	４．巻 20
２．論文標題 Psychosocial Development of Hansen's Disease Sanatoriums Residents in Japan from the Perspective of Ecological Systems	５．発行年 2018年
３．雑誌名 岩手フィールドワークモノグラフ	６．最初と最後の頁 37-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 沼山博・福島朋子・菊池武剋	４．巻 6
２．論文標題 学校教育の学習課題としてのハンセン病問題：総合的な学習の時間との関連から	５．発行年 2019年
３．雑誌名 山形県立米沢栄養大学紀要	６．最初と最後の頁 8-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 沼山博・福島朋子
２．発表標題 台湾・日本語世代の生涯についての心理学的分析
３．学会等名 東北心理学会第73回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 日本応用心理学会	４．発行年 2020年
２．出版社 福村出版	５．総ページ数 -
３．書名 応用心理学ハンドブック	

１．著者名 向田久美子・上原泉・福島朋子・塘利枝子	４．発行年 2017年
２．出版社 放送大学教育振興会	５．総ページ数 244
３．書名 新訂　発達心理学概論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究成果の公表を兼ねて、2017年度山形県立米沢女子短期大学の総合教養講座(地域公開されている)の1コマを担当した。テーマは「戦前の日本人をたずねて」で台湾の日本語世代に関するものである。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	沼山　博 (NUMAYAMA HIROSHI) (00285678)	山形県立米沢栄養大学・健康栄養学部・教授 (21502)	
研究協力者	菊池　武剋 (KIKUCHI TAKEKATSU) (90004085)	東北大学・教育学研究科・名誉教授 (11301)	